

【資料3】

～レフェリー・テクニカル～

【主審編】

2014.4 岐阜小学生バレーボール連盟 審判研修会

※以下「HS」は「ハンドシグナル」のこと

1. 基本姿勢

背筋を伸ばし、ラリー中は肺の空気を吐ききらないように。HSはルールブックの図のとおり形づくる。極端に前傾したりしゃがんだり、左右に傾くことなく、真っすぐ立ち全体を眺望する。

片手を支柱上部ワイヤーに掛けるが、肩越しにボールを見ないよう、ボールの在るサイドにヘソを向けるよう左右持ち替える。アタック時はアタッカー側にボール1個分体を移動させ、ボールコンタクトの瞬間には必ず静止して、一点だけを凝視せず全体を視野に入れる。ボール位置に応じ前後左右に台の上で移動する。

2. サービス許可のタイミングと失敗時の措置

サーバーがボールを保持したら サーバーサイド⇒レシーバーサイド⇒記録・副審・両ベンチの中断の要求が無いかなど見てから、問題なければ速やかにサービス許可を吹笛（前のラリー後8秒で吹笛がベスト）

●サービスミスのケース別措置 吹笛⇒相手サイド（得点）を示した後⇒以下のHSを示す

- ①ネットにかかるボール・・・明らかに越えないと判った時点で吹笛、タッチネットと同じHS
- ②サーバーチームの選手に直接当たる・・・当たった瞬間に吹笛、当たった選手を手のひらで指す
- ③ネット下をノーバウンドで通過・・・ボールが完全に通過したら吹笛、センターライン中央を指差す
- ④ボールが自コート内に落ちたとき・・・落ちた瞬間に吹笛、次のサービスサイドを指すのみ
- ⑤ボールアウトとなるケース・・・《p.39 第5図a》の×の部分。ネット下方の空間は上記③に同じ
- ⑥フットフォールト・・・サービスヒットした瞬間に吹笛。反則したサーバーを手のひらで指す

3. ゲーム中の判定

(1)吹笛のタイミングと大きさ ボールが床に落ちた直後、反則の起きた直後に吹笛できること、笛は強弱ではなく、「強く」と「より強く」の吹き分け、とにかく大きく笛らす（安全のためラリーを止める）

(2)ボールのイン/アウト判定は、自身の判定を持ったうえで、明らかな場合でも必ず責任ラインの線審とアイコンタクトをとり、副審ともアイコンタクトで確認した後にHSを出すくらい、ゆっくり間をとってよい

(3)アタック時のタッチネットやブロッカーのワンタッチを見逃す人は、ボールばかり目で追いすぎている。

1stレシーブは見なくても良いくらいの意識でネット際に目を残し、ネット上部の動作が落ち着いたなら、ボールに目を移す。 ネット下部の反則(ペネレーションフォールト)は、副審に任せ次のプレーを見る

(4)キャッチの反則は、ゲーム序盤の確実に押さえるべきプレーを見逃さないよう集中力を高めておく

(5)反則の種類を正確に理解し、今は何の反則を適用するのか明確にし、反則の発生直後に笛が鳴ることが望ましい（例えば、アタックボールがネットではね返り、打ったアタッカーに当たった瞬間にダブルコンタクト成立。両チームにタッチネットがあった場合、先に触れた方に対して笛が鳴る）

(6)もし間違っても、吹笛してしまった場合は、素直に過ちを認めてノーカウントとし、誤審を押し通さないこと。その後の対応が大事。記録・得点板などが正しいことを確認後、気持ちを切り替えて再開すること

(7)オーバーネットとなりやすいケースを理解し、予測しながら冷静にボールと手の接点の事実を見る

- ①レシーブカットがネット上部相手コートに向かって流れ、セッターがジャンプして相手コート側から取り戻してトスアップするようなケース、またはセッターが2アタックするケースの手とボールの接点
- ②トスがネット直上か相手方に越え、アタッカーがネットを越えてボールに接触しているケース
- ③トスアッププレーを、2アタックと予測した相手ブロッカーが（アタック前に）手を出して触るケース
- ④ネットを越さないボールに相手ブロッカーが自コート側でボールに触れるケース（3打目後は除く）

4. セット（ゲーム）の終了

- ・セットポイント（20点）では、記録・副審に点示が間違いない確認の意味で目を合わせうなずく。より確実性を高めるため、その1点前（19点）の時点で記録を確認しておくことが望ましい。
- ・第3セットでは、7点目および14点目に、あと1点でコートチェンジ、またはあと1点でゲームセットの確認の意味でうなずく。
- ・最終得点が入ったら、セット終了のHSが記録⇒副審の順で出たのを確認して吹笛し、終了のHSを出す。
- ・コートチェンジは、選手に支柱の外側を通るよう誘導する。記録席付近で対面する選手は最小限に留める。
- ・試合終了時は、選手がエンドラインに整列し、ベンチスタッフも全員起立した状態で挨拶させる。

～レフェリー・テクニカル～ 【線審編】

1. ラインジャッジの受持ちゾーンの基本 ～L3番の線審を例示～

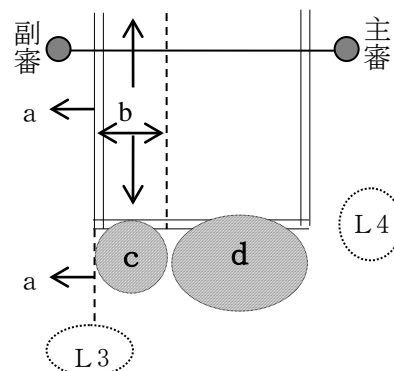
L3の受持ちはサイドライン（及びその延長線）の左側（a）の「アウト」および、サイドライン内側=右側（b）の「イン」
なお、（b）はサイドラインから概ね2mコート内側とする。

（c）付近に落ちたアウトボールはL4の受持ちでL3は責任外だがL4の判定に追従してL3も「アウト」を示したほうが観客からの見た目に違和感が無く良い。なお（c）付近の「イン」の場合はL3も当然受持ちであるから「イン」を示す。

なお、（d）付近の判定はL4の受持ちであり、L3は何も示さない。

どの線審も自分から見て左側の「アウト」右側コート内2mの「イン」の受持ちゾーンの考え方は同じ。

L1・L3はネットの向こう側も受持ちであることは、試合前のミーディングなどで意識させる。



2. その他ラインジャッジに関わる事項

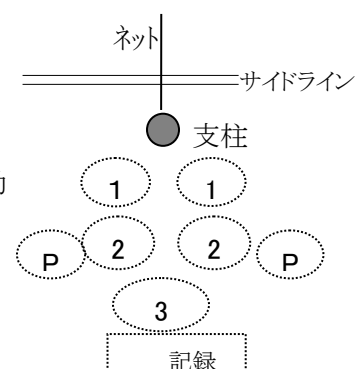
- ① コーナーから1.5～2.0mで受け持ちラインの延長線をまたぐように立ち、左足を半足前方にして構える。
- ② サーバーが左後方（L1・L3近く）までさがって構える場合は、サーバーの視野に入らない様、ただし受け持ちライン延長線を外れないようにまっすぐ後ろにさがる。サーブを打った後定位置に戻る。
- ③ 旗は左右どちらの手に持っても良いが、人差し指を伸ばして棒に沿えて持ち「イン」は45度斜め下向き「アウト」は直上を人差し指で指すよう、肘を伸ばして旗を出す。
- ④ サービス許可の際、旗を前方から”バサッ”と音を鳴らして後方に構えるのではなく、サービス許可の吹笛の時には、右足ふくらはぎの後ろに旗を下げて構え、旗の音は鳴らさないこと。
- ⑤ 判定の直後必ず主審の方を見て、アイコンタクトによる合図（判定の確認）を行うこと。
主審から見られない場合は、自分の受け持ち場所ではなかったと理解する。
- ⑥ ボールコンタクト（ワンタッチ）は自コート側選手の場合、2人ともHS《p.81 ③》を出す。さらにサイドライン外側にボールが落ちたケースでは、L1・L3は相手コート側のものもHSを出す。
- ⑦ アンテナおよびアンテナ外側の物体（ネット、支柱、審判台など）へのボールの接触時には、ラインジャッジ全員がボールの当たった場所を指さし、旗を頭上で右左右と一往復させる。
- ⑧ サーバーのフットフォールトは、ボールをヒットする瞬間の足、またはジャンプサーブの踏切の足を見て判定し、エンドラインまたはサイドライン（サイドライン延長線外側に踏み出している場合）の該当ラインジャッジ1人のみがラインを指さし、旗を頭上で右左右と一往復させる。

～レフェリー・テクニカル～ 【副審編】

1. 基本ルーティンと位置取り

- サービス時 レシーバーサイドの①でサイドラインに平行に立ち
サービスの打たれる瞬間(音)に全員コート内に居るか監視
- インプレー中 ボールの無い側の①でブロッカーを中心に見る
ネット中央より自分に近いプレイの時は②にさがる
- アウトオブプレー 次のレシーバーサイドベンチに目をやりながら(P)の位置へ移動
主審に追従して次のサーバーサイドを指しながらベンチを見てHS。
その後③に下がり、両ベンチ(中断要求等ないか)監視しながら、記録から
の合図(サーブ順誤りなど)がないか目視確認
- 次のサーブ直前 何も問題がなければ主審のサービス許可の寸前に
レシーバサイドの①に進み出て、レシーバー全員を見ながらサーブを打つ音を聞く

【位置取り】



※副審側のアンテナ直上をボールが通過しそうなケースでは、できる限りアンテナ付近に入り見上げて判定

2. ゲーム中の判定・副審の役割

- ・主にブロッカーの着地完了までネット付近の反則判定を受け持つ、アタックのボールを目で追わないこと
- ・ベンチコントロール 監督の座る位置、交代選手の位置、荷物・ドリンクなどの置き位置、マナー等
アウトオブプレーの時には記録席前で左右ベンチ(中断の要求など)の動きを読む
- ・記録のコントロール 次のサーバーの確認は、主審～記録の視線に入らないよう位置し「間違ったサーブに打たせない」を徹底する
- ・中断のコントロール タイムアウト、テクニカルタイムアウト、選手交代、セット間

●副審の責務として判定・吹笛するケース

- ①タッチネットの反則
- ②ペネトレーションフォールト(相手コートへの侵入)の反則
- ③副審側でアンテナまたはアンテナ外の物体にボールが当たった場合は、副審が吹笛してアウトのHS
- ④ボールが床に落下したが、主審が死角で吹笛できていない場合 →副審が吹笛してボールインのHS

3. 主審との連携・主審への合図

- ・HSの追従・・・主審より先に出さない《p.65 22.2.3.1 22.2.3.2》
- ・サーバー順問題なしの記録・主審とのアイコンタクト・・・うなずくだけ
- ・ワンタッチ・アウトの合図・・・お腹の前で小さく三角形。ワンタッチ無き場合はうなずくだけ
- ・3打目がネットを越えない(はね返った)合図・・・4打目触った時、お腹の前に指4本。同じプレーヤーが触った時は指2本
- ・ラストポイント(あと1点でセット終了、テクニカルタイムアウト、コートチェンジ)の記録・主審との確認・・・うなずくだけ

※副審は主審が求めた場合を除き、サイドラインに関わるイン/アウトの合図を送ることはNG

※チームの2回目のタイムアウト、11回目と12回目の選手交代の要求時、主審には要求した監督より先にその回数を通知する。2回目のタイムアウト時は、タイムアウト終了の吹笛後、ボールを次のサーバーに送ってから、要求した監督に2回目である旨通知する。

4. 中断または中断の要求のコントロール

(1)セット間の中断は3分間だが、中断の終了を合図する副審の吹笛は、2分30秒で鳴らす。

(2)タイムアウトのコントロール

要求時監督はHSが必須。口頭だけでは要求とは認められない。

副審は、吹笛→HS→要求サイド示す→計時開始→ボールを受取り→両ベンチを見て、選手をベンチ寄りに寄せ→ボールは記録席横に置いておく→主審と目を合わせ何も無いことを確認→記録に現在の得点と次のサーバー、タイムの要求回数を確認→支柱を背にして両ベンチに目配せ→30秒手前で振り返り主審と目を合わせた後、30秒後、吹笛により（HSは無い）選手をコートへ入れる。

(3)テクニカルタイムアウトのコントロール

・第1セットおよび第2セットでは、リードするチームが11点に達したとき、副審が吹笛し、同時に計時（30秒）に入る。ハンドシグナルは特に無いが、ベンチにさがるよう手振りを加えてもよい。

・第3セットでは、リードするチームが8点に達したとき

①主審はコートチェンジを行う。

②両チームのコート上の6人が、ネットの反対側に移動したら、それぞれのベンチにさがるよう誘導し、両チームの選手全員がベンチ前のフリーゾーンに出たのを確認してから、副審は吹笛し、同時に計時（30秒）に入る。特に主審の後ろを回るチームは遠回りしてベンチに戻ることから、テクニカルタイムアウトの時間に不利が生じないように、選手をすみやかに移動させ、全員がベンチに近い側のサイドラインを越えたら吹笛・計時すること。

・特に5月から10月までの期間では、給水のための時間として給水させなければならない。従って水筒などが選手のもとに用意されているか、逆にベンチスタッフが給水を妨げるような行為をしていないか監視し（飲む飲まないは本人の自由だが）給水を促すこと。テクニカルタイムアウト中、選手がストレッチをしたり、控え選手がモップをかけたり、うちわで他の選手を扇ぐなど、選手の安全管理のためのこれらの行為は禁止ではないが、ベンチスタッフや審判団は、給水をしていない選手に給水を促し、体調を窺う声掛けを積極的に行う。また、審判補助員にあたっている子供達にも、給水と健康・安全のための配慮を行うこと。なお、審判補助員の水筒は得点板の裏側など、試合の妨げとならない位置に置いておく。

(4)選手交代（クイックサブスティチューション）のコントロール

・交代選手が交代ゾーンに入る＝要求とみなす、監督のHSは交代の要求と認めない。

●選手交代の手順 《p.51 15.10》の補足

①副審は長い吹笛しながら交代のHS（主審は吹笛をせず、許可・確認の意味でHSを追従する）支柱付近に立ち、交代選手・監督・記録を視野に入れて立つ。笛は口から外す。

②交代ペアをアタックラインよりネット側のサイドラインを挟む位置に招き、双方片手を挙げさせる。

③記録員は、許可できる正規の要求と確認したら片手を挙げ→副審は胸の前で腕を交差し交代を許可。

④記録員が必要事項を書き終えたら、両手を挙げて記録の記載が完了した旨知らせる。

（→2組以上ある場合は、2人目は記録席脇に待機させ1組づつ上記②～④の手順で交代させる）

⑤記録の記入状況や選手交代の回数を確認し、11回目および12回目の要求は主審・監督に通知。

⑥副審は両ベンチ見て何も問題無ければ、笛をくわえてから両手挙げ、主審へゲーム再開okを合図

<補足>同一チームによる2回（2組）以上の交代の注意点

- ・2人以上の交代選手が、ほぼ同時（連続して）に交代ゾーンに入ってから来れば同一要求とみなすが、時間を空けて2人目がゾーンに入っていくケースは拒否し、交代要求を認めない。
- ・2人目以降の交代選手は、記録の視界を妨げない位置に待機させる。
- ・両チームから同時に交代の要求があった場合は、記録とどちらのチームから受付けるか確認し、片方のチームの手続きが完了した（前ページ④の記録から両手が挙がった）後、反対側のチームの受付のため、該当チーム側に立ち、改めて吹笛とHSを出す（前ページ①～⑥の手順を繰り返す）。
- ・選手交代要求（アタックラインの延長線を越えて入った）時、交代選手の勘違いで監督が意図していないのに、勝手に交代ゾーンに入ってくるケース（受付せず流すケース）には、何事もなかったかのように無視できるとベターだが、副審が吹笛してしまい、その後にチームが交代の要求を取り下げようとするケースは、遅延に対する罰則等を適用する。

(5) 不当な要求 《p.52 15.11》

主審のサービス許可の吹笛後に、交代選手が交代ゾーンに入ったり、タイムアウトの要求した場合、副審は吹笛せず手のひらで抑えて拒否し、ラリー終了後「不当な要求」として記録。もし副審が吹笛してしまった場合は、チームに遅延の罰則等を適用する。

※そもそも主審がベンチの様子も視野に入れながらサービス許可すればこういう問題は起こらない。

(6) 遅延に対する罰則等の適用手順（例：選手交代の場合）

副審は選手交代受付の吹笛 →交代選手がプレーする準備ができていなければ拒否 →主審に遅延警告の合図（手首に反対の手を当てるジェスチャー）を送る →主審は反則を犯したチーム側の腕を斜めに立て、反対の手にイエローカード（チームがその試合を通じて2回目の時はレッドカード）を持って、斜めに立てた腕の手首にカードを当てる。（以前は腕時計にカードを当てるだったが変更なった模様）

5. 副審に関わるその他のケース

- ・得点板が間違っている場合 →副審は次のアウトオブプレー中に点示係りに訂正を指示する。
- ・床が汗でひどく濡れた時 →副審は片手を挙げ濡れた箇所に行く。コート上の選手は携帯タオルでワイピングさせ（手のひら・ひざ当てや靴で拭くのは認めない）床の状態を自分で確認後、定位置に戻りゲーム再開OKの合図の意味で両手を挙げる。なお、携帯タオルでは追いつかないほど、ひどい濡れ方の場合には、ベンチスタッフにモップを入れて拭くよう指示する。
- ・選手が負傷した場合 まずゲームを止めてケガの状態を確認後、措置方法を判断する。
治療に時間を要しそうな場合、ベンチに交代選手が居る場合には正規の選手交代をするよう促す。
交代選手が居ない場合、短時間なら応急治療させ、治療後「回復のための3分間」のタイムアウトを与える。もし回復できない場合にそのチームは、不完全を宣言され、そのセット・試合を失う。
- ・記録のもたつき時 →片手を挙げて主審にサービス許可を待たせるが、もし主審が気づかず、サービス許可の吹笛をしてしまったら、副審が吹笛してでもゲームを止め、記録側の問題を解決する。
- ・判定への抗議は認めないが、ベンチスタッフの場合は副審が早めにエスカレートしないよう抑える。

以上